



藤原一平 教授

専門:マクロ経済学・国際金融論

(インタビュアー:菊井・春原・敷田)

『経済全体をシステムとして捉えるマクロ経済学』

Q. 藤原先生の専門とされている研究内容はなんですか？

マクロ経済学が専門です。経済全体をシステムとして捉えて分析すること、具体的には、経済を連立方程式体系のようなもので捉え、ある所で発生したショックが他にどのように波及するかといったことや、そうした波及経路を前提にした場合にどのような政策をデザインすべきなのかといったこと、を分析しています。

最近では、国際マクロ経済学に関するトピックに力点を置いています。例えば、どのような状況で、国際的な政策協調（国々が協力して政策を遂行すること）からのメリットが大きくなるのか、といったことや、ゼロ金利制約（名目金利がマイナスにはなれないという制約）に直面するもとは、世界各国の中央銀行がどのように金融政策を遂行すべきか、といったことについて研究しています。こうした研究成果を、国内外のコンファレンスやセミナーで発表し、様々なコメントを受けた上で、最終的には、学術誌に掲載するようなことをしています。時には、学術的な研究を、わかりやすく伝えるような媒体（雑誌や新聞）に公表することにも努めています。

『グローバルなスキルを身につけたかった!』

Q. マクロ経済学を研究することになった経緯を教えてください

僕は、(余談ですが)早大学院出身で、その後、政経学部政治学科を卒業しました。ですから、経済学を学生時代に勉強していたわけではないんです(こんな感じですから、慶應の経済学部で教職に就くなんて想像もしていませんでした!)。その後、日本銀行に入行し、留学試験の際に、アメリカのビジネス・ス

クール留学を希望したら、イギリスでの経済学留学となったのが、実は経済学を真剣に勉強するようになったきっかけです。これは、28歳の時で、恥ずかしいながら、決して、崇高な意識から経済学を勉強し始めたわけではなかったんです。でも、実際に真剣に勉強してみると、なんとなく不思議だなと思っていたことを真正面から取り組んで答えを見つけようとする経済学にはまりましたね。

その後、オックスフォード大学での2年間の留学を終えて、日本銀行に戻った際に、経済をシステムとして捉えるマクロモデルの担当部署に戻りました。そこでは、マクロモデルを用いた予測や、(どのような政策が望ましいかを知るための)政策シミュレーションを行うと同時に、モデルの開発なども担当しました。仕事を通じて様々な学術研究も行うようになり、海外の中銀や大学でのコンファレンスやセミナーで発表も行うようになりました。そうしたうちに、研究の仕事に情熱を感じるようになり、2011年に日銀を退職し、オーストラリア国立大学にて、大学教員の道を歩み始めました。

就職するにあたっては、(もちろん、どんな仕事についても成長するのですが)まず、目に見えるスキルを着実に身につけていきたいな、と漠然と思っていました。といっても、それが何かという具体像はありませんでした。その後、日銀にて、仕事をしながら、実体経済や経済理論を勉強する機会をもらって、マクロ経済学がスキルとして身につけていったように思います。

次に、世界中を飛び回るようなグローバルな人材になりたいとも願っていました。マクロ経済学やその政策への応用に時間を費やすようになると、海外の同僚たちと学会などを通じて、意見交換する機会が増え、結果として、海外にも頻繁に出張するようになりました。ついには、マクロ経済学を教えるということで海外の大学にも就職しました。ラッキーだったと思います。経済学さまざまです。こうした幸運に応えるためにも、これからも経済学には真摯に取り組んでいきたいと思っています。

『経済学には面白いことだらけ!』

Q. どうしたら経済学が生きる上での武器となりますか?

世の中には、経済学的にみて、おもしろいことだらけだと思っています。同時に、経済学は必ず役立ちます。僕は経済学を深く勉強することなしに、日銀で働きはじめたので、実践的なところから経済をみるようになりました。ですか

ら、「経済学は役立つの？」という疑問よりも、逆に、「なぜ、現実経済はこのように動いているのか？」ということを理解するために、経済理論を勉強する必要にかられました。

例として、まず、金融政策を考えてみましょう。中銀は、金利を引き上げることによってインフレ率を低下させます。当たり前じゃないか、と思うかもしれませんが、同時に、インフレ率が高いときに金利は高くなります。不思議だと思いませんか？インフレ率を下げるために金利を引き上げるのに、インフレ率が高い時には金利が高くなるんです。これを理解するのは、実はそんなに簡単なことではないんです。価格の粘着性といった考えに基づく動学的な経済理論が必要となるんです。

当たり前だと思っているけど、よくよく考えてみると、どうしてそうなっているかを上手く説明できないことって沢山あります。世の中はまだまだ面白いことだらけです。数式を使った理論を理解しなくてはいけないといっている訳ではないのですが、理論のエッセンスを理解することで得られる人生の教訓は多いと確信しています。

ほかに、面白い経済学的な話っていくつかあります。「退職者の消費パズル」というのもあります。これは、定年退職した人の消費支出が著しく低下する、というものです。これもまた、当たり前のことではないか、と思うかもしれませんが、しかし、定年退職というものはある程度想定できるものです。ですから、合理的であれば、退職する前より貯蓄をするなどして備え、定年前と後でも消費水準が大きくかわらないようにするはずだと思いませんか？そうはいつでも、「実際に給与所得がなくなるのだから、合理的ではなく行動経済学的に消費を控えるようになるのではないか」、「交際費のようなものがいらなくなるのではないか」といった説明もあるかと思います。最近、米国で発表された論文によると、「退職者の消費支出が落ちるのは、安いものを買えるようになるからだ」というのです。「退職者は、時間が沢山あるので、安いものを探す時間が増える。例えば、コストコのようなところでお金をより使うようになる。この結果、消費量は変化しないのですが、支出金額が低下する」というのです。面白いと思いませんか？こうなると退職者は極めて合理的に行動しているということになるんです。ちょっと違った視点からみると、同じことが全く異なって見えてくるんです。

これは、僕の専門分野ではないのですが、貧困の問題でも面白い研究が報告

されています。途上国では、学校に通っていない子供が沢山います。ですから、どのような政策をとれば、より多くの子供たちが学校にいけるかというのは、重要な問題です。もちろん、資源が無限だったら、例えば、学校に行けば、沢山お金（例えば100万円）をもらえる、とすれば、みんな学校に通うようになると思います。学校に通うようにすることはとても重要ですが、そんなに多くの資金を割くことはできません。まさに、有限な資源をいかに効率的に使うか、という経済学の問題です。そこで、同じような学校を50校くらいずつ選んで、一つのグループにはなんらかの政策を行い、もう一方のグループには何も行わない、ということで政策効果に関する実験が行われました。そこで、「効果的な政策は、虫下しを配布すること」といった驚くべき結果が得られたんです。実は、学校に行けない大きな理由は、子供のお腹の中に寄生虫がいることだったようなんです。虫下しの薬って全然高くないので、これは、コストパフォーマンス的にも素晴らしい政策なんですよ。こうした実験をして、政策提言をすることも経済学なんです。

経済学を通じて、常識と思っていることが、実はそうではないかもしれない、と考えるきっかけになってもらいたいと願っています。経済学では、まだ、わかっていないことが沢山あります。そういうことにチャレンジして、自分で考えて答えを求める作業を面白いと思ってもらいたいとも思っています。

『色々なことにチャレンジして欲しい』

Q. 藤原先生の教育理念を教えてください

経済学とか学問の面でいえば、面白いものを面白いと思うまで、少しの努力や辛抱が必要なことが多いです。そこまでがんばって欲しいな、と思っています。授業やゼミなどを通じて、学生のみなさんがこうした気持ちになってもらえたらと願っています。

大学生活という面でいえば、色々な経験ができる場なので、様々なことにチャレンジしてほしいと願っています。これは、大学生活で一番大切なことですが、大学での教育などを通じて、僕が教えられるようなことでもありません。僕自身は、いつも研究を通じて世界にチャレンジしていくつもりです。知的な貢献は極めて小さなものかもしれないのですが、そのような姿勢をみせ続けることができればと思っています。

『他人と面白いものができる楽しい!』

Q. 藤原先生の学生時代のお話を聞かせてください

かなり大きなテニス・サークルの幹事長をしていました（塾連の人と早慶パーティーというのにも参加したことがあります）。ですから、これの活動がメインでした。様々な貴重な経験をさせてもらいました。人が多いと方向性も様々で、自分の思うようにいかない（他人の思うように自分が行動していない）ことが多いのですが、たまに、みなの方角性が一致するような瞬間があったりして、これはなんともいえない素晴らしい時間でした。

会社でも、いろんな局面でこうした瞬間を経験をしました。社会人になっても、十分に楽しいことが一杯ですよ。今は、論文を共同で書くことが多いのですが、意見が合わなくて、共著なんてしなければよかった、と思うこともあります。議論の仕方の異なる海外の共著者とは、すれ違いの連続となったりすることもあります。しかし、真剣に意見をぶつけることでしか論文はよいものになりません。最後にはいつも、共著でよかったなと思うようになります。そんな繰り返しをしています。

『受け身の姿勢ではなくアツくなれる人!』

Q 藤原ゼミを志望する2年生に求めるものは何ですか？

大学時代のゼミの最も素晴らしいことは、様々なバックグラウンドを持った友人と出会えることだと思います。部、サークル、アルバイト等を通じたつながりも素晴らしいものですが、ある程度共通の志向を持っている人のグループとなりがちです。ゼミという新しい軸を通じた友人は、その後の人生にとって、かけがえのないものとなるはずです。

ですから、多様な人に志望してもらえればと願っています。多様性を通じて、様々な価値観を共有することではじめて、新しい考えや見方が得られます。ですから、色んなことに、受け身じゃなくて自分から主体的に取り組もうという意識を持っている人と一緒に勉強していきたいですね。それが表に出るか出ないかは人によるのですが、心の中にアツいものがある学生と学べることは、教員としてこの上なく幸せなことです。

なんとなく選ぶゼミかもしれないのですが、卒業して20年を過ぎた今でも、ゼミの仲間と集まったりします。僕のゼミ生にもそういう風になってもらえたらと願っています。

『自分の意見を冷静かつ情熱を持って議論できる学生が多い!』

Q 藤原ゼミにはどのような学生が集まっていますか？

他のゼミを知らないため、比較はできないのですが、自分の意見を冷静かつ情熱を持って説明できる学生が多いように思います。すでに、ゼミが始まって2か月くらい経つのですが、自分の意見を適切に述べる、説得的な議論を展開する、という能力の上達には目覚しいものがあります。社会人として活躍している方々にも月に一度程度ゼミにきていただき、これまでの経験などをシェアしてもらっているのですが、みな、積極的に質問したり、自分の意見を述べています。いつも、講師の方からも、「勉強になった」と評価をもらうくらいです。何が正しいかを共有したり定義できない状況でも、自分が正しいと思える議論を説得的に展開するような能力を、より一層高めてほしいと思っています。

ゼミでは、①公表された金融経済指標の解説、②来年出版予定の「中級マクロ経済学（東大の青木先生との共同執筆）」の輪読に加え、③自分が面白いと考える研究テーマについてその手法や想定される結論を述べるプレゼン、を学生には担当してもらっています。これまで発表してもらった研究テーマプレゼンは、みなオリジナリティに溢れていて、とても興味深いものばかりです。慶應の学生って優秀だなと実感しています。ゼミからみて、慶應の学生が世界のトップスクールで通用するのは間違いないですね。だから、自信をもって、何事にもチャレンジしてほしいと思います。

『教員も学んでます!』

☆最後に2年生へのメッセージをお願いします☆

今のゼミ生や2年生は、僕が会社に入った頃に生まれたんですね。ゼミなどを通じて、僕の経験から学べるものが少しあるかもしれないですが、同時に、僕自身も、若い学生さんたちと議論することで勉強させてもらっています。会社でも後輩や部下といった若い人から刺激を受けてきたのですが、人事評価とかがあるため、どうしても、完全にオープンな形で話をするのは難しいことがあります。

ゼミ生からはいつも斬新なものを見方を提示してもらっています。たしかに、既存の経済学については、僕の方が経験が長いため、知識の蓄積は大きいですが、しかし、一方で、物事の捉え方、議論の展開方法というものがある程度確立さ

れてしまっているという面もあります。ゼミでは、「こんな発想があったのか！」といった知的刺激を受けることができ、とてもありがたいと思っています。ですから、自分の意見を説得的に述べることにいつもチャレンジしてください。間違えていることなんてありません。僕は43歳のおじさんだけど、まだまだ、みんなからも新しいことを学んで、様々なことにチャレンジしていきたいと思っています。